

考古学研究者からみた歴史教育・教科書

佐藤 由紀男*

はじめに

筆者は、2021年4月には岩手大学教育学部に赴任して13年目となり、退職まで2年である。当初は生涯教育課程に所属していたが、現在は学校教育教員養成課程の教員であるから、例えば考古学概論の講義でも、歴史教育や教科書にかかわることに触れてきた。現時点で専任教員として学校教員養成にあたっている考古学研究者は、国内では筆者が唯一であり、退職後に後任を採用する予定はない。筆者のような立場の教員は皆無となり、今後もこの状況は続くであろう。そうしたこともあって、授業で取り上げている内容の一部を覚書程度の拙い短文ではあるが残しておくことにする。

1. 考古学研究者からみた歴史教育

考古学の研究対象は、人類の行為・行動の結果として残されたモノ（痕跡）すべてである。人為物と呼ばれることも多く、考古学的記録・考古学的痕跡という語句で説明されることも多い。移動可能な土器や石器などは遺物、移動が不可能な住居跡や墓穴などの構築物を遺構と呼ぶのが通例であり、それらが確認される場所が遺跡である。研究の対象範囲は人類の誕生から現在までであるが、現在を対象とすることは極めて例外的であり、過去の文化や社会の復元・解明を一義的な研究目的としている。なお、人類の行為・行動のすべてが痕跡を残すわけではないので、思想・宗教などは実現された思想・宗教にかかわる痕跡（例えば寺院などの遺構や仏像などの遺物）が研究対象となる。また当然ながら形として現在に残ったモノが研究対象であるから、有機質の遺物などは堆積・埋没状況にその存否は左右される。考古学はこうした資料的な制約を受ける学問でもある。

このように過去の文化や社会の復元・解明を一義的な研究目的とした学問であるが、研究に臨む立場は様々である。昨今はプロセス考古学とポストプロセス考古学の二つが世界的な潮流であるが、この両者よりも考古学を文化人類学（民族学）として扱う立場と歴史学として扱う立場の違いの方が、より根源的である。

文化人類学としての考古学の立場は、アメリカ合衆国の考古学では主流である。これは考古学的方法で追求されるネイティブアメリカンの歴史研究が、人類学・民族学の分野に位置づけられていることとも関係するのであろう。ちなみにプロセス考古学は文化人類学としての考古

* 岩手大学教育学部考古学研究室

学の立場であるが、人類における普遍性や法則性の追求を志向する傾向が強く、この点は必ずしも文化人類学の主要な潮流と一致しているわけではない。それゆえに非主流とされることが多い新進主義人類学との関係が深いのであろう。

文化人類学は、人類の単一性という前提のもと異文化を理解し、相対化し、文化の多様性の理解をすすめる中から人類とは何なのかを追求する学問である。また1920年代にフランツ・ポアズが、文化の違いとはその社会の固有性にかかわるものであり、ある文化を他の文化の基準に照らして高低を判断したりすることはできないとした「文化相対主義」の原則が異文化理解の基礎となっている。個別の文化間に優劣はなく、対等に理解するということである。

例えば東北北部・津軽平野の狩猟採集を生業の基盤とする縄文時代晩期の仮称・亀ヶ岡文化と灌漑稲作導入後の弥生時代前期の仮称・砂沢文化を比較する時、亀ヶ岡文化と砂沢文化を時間の先後関係とは関係なく、対等に比較する視点が肝要となる。

歴史学は過去の事物を取り上げ、その意味を探る学問であるが、過去の変化の延長として現在をとらえ、現在の社会や文化を歴史的に理解することを追求する学問でもある。文化人類学とは異なり、変化を重視する学問といえる。

亀ヶ岡文化と砂沢文化との比較でも、時間的に隣接する文化どうしであるから、亀ヶ岡文化から砂沢文化へという変化の視点が重要視されるのは当然である。

変化という認識であれば問題視する必要はないが、文化相対主義が提唱される以前の初期の文化人類学では、文化人類学者はヨーロッパやアメリカの白人であり、自文化の優位性を前提に白人以外の異文化を劣ったものとする自民族（自文化）中心主義が貫徹していた点が見逃せない。現代の我々の意識の中に、かつての自民族（自文化）中心主義のような、現代文化中心主義とでも呼べるような考え方が垣間見ることが懸念される。現在の我々のような文化・社会のあり方が、現時点においては人類の最も進歩・発展した最良の姿であると先験的に認識する風潮である。これは過去が現在よりも劣っていたとする考えと一体であり、この考えにたつ者は過去からの「変化」を「進歩」や「発展」という語句で表現することが多い。

例えば前述した狩猟採集を生業の基盤とした亀ヶ岡文化の進歩・発展した文化が灌漑稲作も生業の一つとして導入した砂沢文化であり、さらに進歩・発展したのが広大な灌漑水田も営むようになった弥生時代中期の津軽平野の仮称・垂柳文化であると位置づけ、そうした進歩・発展の延長に現在の文化・社会を位置づけるのである。狩猟採集社会よりも農耕社会が、そして国家という統治機構を有する社会が、また文字を持たない文化よりも持つ文化のほうが進歩・発展しているとする考え方であり、狩猟採集を生業とする文化・社会が現在の我々の文化・社会よりも劣っていると認識することと通底する。文化相対主義とは相いれない認識である。

現在でも狩猟採集を主たる生業としたり、文字を持たなかつたりする集団は地球上には存在し、近年までそうであった集団も多い。こうした集団の人たちは文化的に現在の我々よりも劣っていると考えるのであり、こうした差別意識の形成と現代文化中心主義のような考え方は結び付いている可能性が高い。我国でも認められる民族差別などの差別意識の形成にも関与しているであろう。こうした差別意識は実際の差別的言動に直接的には関与しないことが多いために、潜在化し、差別意識を持つ本人もそれを認識していない危険性がある。

以上のように、歴史における「変化」を、概念規定も曖昧な「進歩」や「発展」という語句で理解しようとすることは、差別意識を醸成する危険性をはらんでいると考えられる。歴史学にかかわる者、なかでも歴史教育に関与する者は、この点を認識し、自らの潜在的差別意識につい

でも内省・内観しなければならぬ。考古学、特に文化人類学としての考古学からみたときに、歴史教育における大きな課題として指摘することができる。小・中学校の教員の歴史の授業における無意識的な発言が、児童・生徒の潜在的な差別意識の形成に関与している可能性を、特に憂慮しているところである。

2. 考古学研究者からみた歴史教科書

盛岡市内の公立中学校では教育出版の『中学社会 歴史 未来をひらく』（深谷ほか2016）が、岩手大学教育学部附属中学校では東京書籍の『新編 新しい社会 歴史』（坂上ほか2016）が中学校の歴史の教科書として使用されている。2016年版のこの2冊の教科書の弥生時代の項目を検討することから、歴史教科書の記述にかかわる課題に触れることにする。ちなみに両教科書ともに、著者として記載されている中に考古学研究者は見当たらない。

① 教科書の記述方針

両教科書ともに弥生時代の項目の挿絵に描かれているのは、環濠集落とその周辺の灌漑水田である。写真として掲載されている遺物も石庖丁、壺形・甕形・鉢形もしくは高坏形の組み合わせからなる弥生土器のセット、銅鐸、金印が共通する。教育出版本ではそれらに加えて銅剣、東京書籍本では銅鏡と佐賀県吉野ヶ里遺跡出土の首のない人骨が掲載されている。中国の歴史書を引用して当時の近畿以西の西日本の様相を述べたり、金属器の伝来に触れたり、弥生時代の項目の最後で邪馬台国とその女王の卑弥呼に触れたりする点も共通する。日本列島の中でも近畿以西のいわゆる西日本（なかでも九州北部）の事例を主に取り上げている点も同様である。そして両教科書は弥生時代を、灌漑稲作（教科書では灌漑水田、石庖丁で示す）を始めた結果として、戦いや支配・被支配の関係が生じ（環濠集落や首のない人骨、中国の歴史書で示す）、各地に小さな国が成立し、その国の支配者は中国と朝貢の関係を結ぶ（金印、中国の歴史書で示す）ようになった時代として説明する。両教科書とも、稲作、戦い、国の三つの語句を用いて弥生時代の社会を説明することを、生徒への課題として提示していることから、これが本単元の主たるねらいであることがうかがわれる。

考古学研究者の多くは、弥生時代は地域差が明確であり、様々な地域文化が形成された時代として理解している（石川1996ほか）。東北北部の弥生時代は、津軽平野の垂柳遺跡ほかの大規模な灌漑水田で代表されるように、灌漑稲作の存在は明確であるが、戦い、支配・被支配の関係、そして国の存在を示す考古資料は存在しない。両教科書で共通する記述の中で、津軽平野で確認されるのは灌漑水田のみである。灌漑稲作を開始すれば、階層化や政治的世界が必然的に形成されるかのような教科書の説明では、理解が不可能である。弥生時代の研究者は、階層化の要因について、支配・被支配の容認とも関係する自然観などのいわゆる世界観の縄文時代との違いに注目している（下條2010ほか）が、教科書がこの点に触れることはない。そして、それ以外の多くの要因が複雑に関連しながら、社会の階層化、政治的世界の形成は進行したと理解する研究者が多いが、教科書の説明は極めて単純化されている。社会の階層化・政治的社会の萌芽への道程を単純化し、法則的・必然的事象のごとく記述することは、弥生時代の人たちが別の道を選択する可能性もあったことを否定し、かつ生徒たちがそうしたことに思いを馳せる機会を失わせることでもある。

教科書においても、同時期の北海道・沖縄には弥生時代という時代区分が適用できないことが述べられているので、それ以外の日本列島に適用される時代区分であると理解することができるが、前述のように西日本（なかでも九州北部）の資料を用いた記述であり、それ以外の地域の様相に触れることはない。弥生時代の文化要素について考古学研究者は、山内（1932）に倣って大陸伝来の要素、縄文時代からの伝統として引き継いだ要素、弥生時代固有の要素の三つに区分して理解することが多い（佐原1975、石川2010ほか）が、教科書は西日本の資料の中でも大陸とかかわる要素を中心に記述している。九州北部を主たる研究対象としている高倉洋彰は、弥生時代の文化は朝鮮半島の無文土器文化・原三国文化の一類型（地域的変容）であると述べる（高倉1995）。九州北部の弥生時代の地域文化の理解に限定すれば妥当かもしれないが、教科書の弥生時代の記述は、この理解を北海道・沖縄以外の日本列島全体に当てはめようとするようなものである。

教育出版本の弥生時代の項目のタイトルは「楽浪の海中に倭人あり」、サブタイトルは「稲作と『くに(国)』の始まり」である。まさにこのタイトルに沿った記述であり、弥生時代とはいかなる時代であったのかを、列島レベルで理解させることを目的としたものではない。教科書は弥生時代を国家形成の前史として描くことを大前提に、それに関連する文化要素や地域（西日本、なかでも九州北部）を主に取り上げ、歴史の複雑性やダイナミズムをあえて単純化し、粗雑かつ拙速に記述しているのである。先験的な命題に沿って資料を選択・解釈するという、研究書であれば不適切と批評される方法で記述している点に注意が必要であり、また教科書を使用する教育者は、この点を認識する必要がある。

先行する縄文時代は12,000～13,000年程度継続した時代であるが、教科書の挿絵・写真・記述はその後半を主としている。弥生時代が西日本の記述を主としていることと通底する。

② 文化概念と時代概念の混用

モノを研究対象とする考古学研究者が、研究のために行う共通事項は「型式」分類である。型式とは、形態のうえで認識される分類単位であり、型式を構成する各個体は、わずかな違いはあるものの、ほぼ同じものの一群と見えるほどによく似たものの集まりである。そして型式は時間的・空間的なまとまりをもつ（費1991、松藤2010ほか）。現在の型番を同じくする各種の道具・機械は工業製品であるためにまったく同じモノで構成されているが、こうしたまとまりがここでいう型式であり、すべてのモノに型式設定は可能である。そして考古学では、別個ないくつかの遺跡できまって発見される同時期の同型式の組み合わせを文化とよぶ（チャイルド1956）。同じようなイエに住み、同じような道具を用いて生業活動や調理をし、同じような服やアクセサリを身に付け、同じような墓に葬られるような状況を同一の文化に属していると認識するのである。私たちが通例認識している文化は、こうしたいわゆる物質文化だけではなく、心性的な部分や価値体系なども含んでいるが、考古学的な文化の把握方法の特殊性は前述したような資料的な制約に起因する。

時代概念はそれとはまったく異なる概念である。考古学の時代区分は「特徴的で、重要で、普遍化していく考古資料の出現をもって画期が設定され、時代が区分されてきた」（近藤1986）。縄文時代は土器という特徴的で重要で普遍化していく考古資料の出現をもって旧石器時代と区分され、弥生時代は灌漑稲作の出現、古墳時代は前方後円墳の出現をもって区分されるのが通例である。文献史学の時代区分も原理は同様であり、江戸時代は江戸幕府の成立をもつ

て先の時代と区分される。一つの事象をもって画期が設定され、時代は区分される。また一つの時代区分が適用される範囲は、政治体制や言語、住民の系譜、地理的区分などの文化とは次元の異なる要因によって規定される空間である。

時代と文化にはこうした違いがあるので、弥生時代という時代区分が適用される時空の範囲が、一つの文化として認識される時空の範囲と一致することやその逆は、よほどの例外でなければありえない。縄文時代も弥生時代もそれが適用される時空の範囲には、極めて多くの文化が存在したのである。仮称ではあるが、津軽平野の縄文時代晩期の亀ヶ岡文化、弥生時代前期の砂沢文化、中期の垂柳文化などと前述したとおりである。個々の文化を文化グループやテクノコンプレックスと呼ばれるような上位概念（高瀬2014ほか）にまとめることは可能であるが、それと時代名が適用される時空の範囲が一致することも例外であるし、それを確認するためには多くの検討作業が必要である。

教科書は、こうした考古学研究者としての基礎的な素養を持たない方が執筆したためであろうか、文化概念と時代概念が混用され、弥生文化と弥生時代が相互に互換性があるかのごとき記述すらなされている。東京書籍本では稲作、金属器、弥生土器を指標に弥生文化を規定し、弥生文化の時代を弥生時代とする。教育出版本では稲作、弥生土器、金属器で弥生時代を規定する。東京書籍本は文化と時代の明らかな混用が確認される。教育出版本は、複数の要素の「組み合わせ」で規定されるのは文化であるにもかかわらず、それで時代を規定するという、ここでも文化と時代の混用がみられる。

筆者も弥生文化という語句を使用することはあるが、それは実態としての文化ではなく、「弥生時代の文化」を指し、その旨は注釈するようにしている。弥生時代の時空的範囲の様々な文化を総称しなければならぬときに、やむを得ず仮に使用する語句であり、弥生文化という実態としての文化が存在するわけではない。

この文化概念と時代概念の混用は、教科書の記述そのものにも混乱をもたらしている。

教育出版本の26～27ページでは「紀元前7～6世紀ごろ、朝鮮半島などから、人々が新たな土地を求めて九州の北部に渡ってきました。これらの人々は、水田での稲作や、新たなつくりの土器や農具などの大陸の文化を日本列島に伝えました。紀元前4世紀になると、稲作などの新しい文化は西日本一帯に広まり、(中略) このころの土器は、貯蔵・調理・食器などの使いみちに応じた新しい種類のもので、発見された場所にちなんで、弥生土器と呼ばれています。また、金属器も大陸から伝わり (中略) 使われました。このように、稲作が広まり、弥生土器や金属器を使うようになった時代を、弥生時代といいます。」と記述している。この記述であれば、弥生時代は紀元前4世紀以降と理解するのが妥当である。では紀元前7～6世紀ころの水田稲作は開始しているが、金属器が伝わらない段階は何時代なのであろうか。この混乱は、中学生も気が付く可能性がある。一つの事象（この場合は灌漑稲作（教科書では水田稲作））をもって時代を区分するという原則に従わないで、時代概念と文化概念を混用したことが招いた混乱である。原則に従えば、当然ながら紀元前7～6世紀ころの九州北部は弥生時代であり、この時期と紀元前4世紀との違いは文化の違いということになる。

③ 教科書ごとの記述の違い

考古学は前述のような資料的な制約などにより、歴史的事実として断定できる事柄は限られている。例えば、弥生時代の開始時期（灌漑稲作の開始時期）なども諸説あるので、教科書の

記述にも違いが生じる。この点を問題視する向きもあり、模擬授業の時などに困惑する学生も存在するが、書籍が著者の学説に基づいて執筆されるのは当然である。ただし、ここで取り上げた二つの教科書の著者には考古学研究者は見当たらないので、著者自身の学説ではなく、依拠する学説の違いである。著者が考古学の学界動向に配慮していれば、時間の経過とともに、自ずと一定程度の共通性・統一性は生まれてくると考えられる。文献史学部分の教科書記述よりも考古学部分のほうが、教科書ごとの違いが現れやすいのは、考古学の特徴の一つとして理解するのが妥当である。

おわりに

2021年4月には改訂された中学校の歴史教科書の使用がはじまる。使用以前に改訂版を確認することはできないので確証はないものの、過去の改訂を参照すれば、2-③で取り上げた教科書ごとの記述の違いなどは少しずつ解消の方向に向かうであろう。しかし教科書の記述方針や文化概念と時代概念の混用は、過去の改訂例から判断すれば、現状のまま継続することが予想される。

1で取り上げた歴史教育の課題は、杞憂にすぎないとの指摘を受けるかもしれない。しかし、授業時に学生が提出した小レポートで「文化が対等であるとの認識を、これまではまったく持っていなかった」などの記述に接したり、4年次の後期に行う学生の模擬授業において、その学生が中学生の時の教員が授業で触れた、明らかに誤認と考えられる歴史認識の影響を、卒業直前まで払拭できないでいることを知ったりすると、杞憂であるとは思えない。拙文であえて取り上げた所以である。

参考文献

- 石川日出志1996「弥生時代をどのように描くか」『国府台』第6号 和洋女子大学文化資料館
石川日出志2010『農耕社会の成立』 岩波書店
近藤義郎1986「総論」『岩波講座 日本考古学』6 岩波書店
坂上康俊ほか2016『新編 新しい社会 歴史』 東京書籍
佐原真1975「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座 日本歴史』1 岩波書店
下條信行2010「弥生石斧の本質」『季刊考古学』第111号 雄山閣
高蔵洋彰1995『金印国家群の時代』 青木書店
高瀬克範2014「縄文文化の資源・土地利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集
チャイルド (Vere Gordon Childe) 1956『考古学とは何か』(邦訳は近藤義郎1969 岩波書店)
費元洋1991「様式と型式」『考古学研究』第38巻第2号 考古学研究会
深谷克己ほか2016『中学社会 歴史 未来をひらく』 教育出版
松藤和人2010「考古学の資料と方法」『よくわかる考古学』ミネルバ書房
山内清男1932「日本遠古の文化 IV縄紋式以後 4」『ドルメン』第1巻第9号 岡書院